

と、そして原発災害の詳細についても記している。第2章から第4章までは、災害弱者と呼ばれる障害者に焦点を当て、当事者の視点を含め福島第一原発事故をめぐる問題についても記している。第5章と6章では、「老い」が課題となり、第6章では福祉施設が地域にどのように受け入れられるかを明らかにしている。そして、第7章と第8章では、外国人・移住者と震災について記している。第7章では、「復興ナショナリズム」について触れられており、興味深い。「がんばろう、日本」という言葉について、著者の郭基煥氏は「外国出身住民は、この主体としての資格があるのか、という不毛で寒々しい問いのなかに置かれてしまうのではないだろうか」(p. 155)と問うている。しかし、実は同様のことは外国人のみならず、日本人にも実感することができる。例えば、東日本大震災発災以降掲げられている「がんばろう、東北」というスローガンがそれである。この言葉の中には茨城県や千葉県、長野県は入っておらず、被害が大きかった地域もどこか取り残されてしまっている面がある。第8章では、著者のアンジェロ・イシ氏が記すように在日ブラジル人が日本語で「がんばろう日本」とポルトガル語雑誌で書いている事例を挙げ、「これも、『チーム日本』から排除されたくないという意思表示だと私は捉えている」(p. 178)とあるように、何気なく使用している「言葉」の力についても今一度考えなおす必要があることに気付かされる。最後に、第9章では、日本社会全体の変容について記し、経済や産業のあり方と公平・保障、ケアとの関係について述べられている。

本書には、当事者視点も盛り込まれ、東日本大震災や阪神大震災発災時に何が起こったのか、そしてどのようにして「障老病異」の人々が生き抜いてきたのかについて知ることができる。ただ、本書の前半部分であまりにも障害者や高齢者などのいわゆる災害弱者に焦点が当てられているために、他の被災者の状況への目配りがされていないのには疑問が残る。なぜなら、こうしたことによって「災害」そのものの実態が不透明なものになってしまうように思われるからである。東日本大震災の場合には、広域災害であったことに加え、津

天田城介・渡辺克典編著

『大震災の生存学』

(青弓社、2015年)

森 山 花 鈴

本書は、立命館大学生存学研究センターが東日本大震災をテーマに主催したシンポジウム「災(さい)/生(せい)―大震災の生存学」(2013年11月14日)を契機として発行されたものである。

本書によると、生存学は、「障老病異」(「障害」「老い」「病い」「異なり」)を研究対象としており、この状態にある人々の生き抜く技法や生の過程に着目した上で、生存の現代史、生存のエスノグラフィ、生存をめぐる制度・政策、生存をめぐる科学・技術という四つの課題群を打ち出し、新たな科学のあり方やあるべき世界の実現方法を示すことを課題としている(「はじめに」より)。

第1章では、東日本大震災・原発事故を契機とする社会的排除について着目し、震災関連死の状況や児童虐待率の増加などから構造的な「つながりの貧困」について記し、社会的に排除されたのが障害者、高齢者、病者、子どもなどであったこ

波災害および原発事故も生じていたため、これまでにあった他の災害と比べ特殊性が増している。震災発災直後、障害者や高齢者が取り残され避難所に入れないといったことも多くあったが、障害者や高齢者でなくとも避難がうまくいかなかったケースも多くある。そのため、過去を反省し様々な人々の知見から対策を練り直すことは必要だが、発災当初は誰しもが必死であるため、批判ばかりになってしまうとお互いの傷つけ合いにとどまってしまう。この点においては、生存学で「障老病異」を研究対象とする際には、そうではない人々のことをどのように定義するのか、そして対照群として比較することが、当時何が起こっていたのかを知る上でも重要であるように思う。

しかしながら、震災関連の書籍が多くある中、本書は「生存学」として当事者の視点からも丁寧に事例が積み重ねられており、非常に参考になるものである。特に、災害を経験したことが無い方や実態を知りたい方にお勧めしたい。